

みやぎ・シー・メール

第 3 号

平成 6 年 6 月

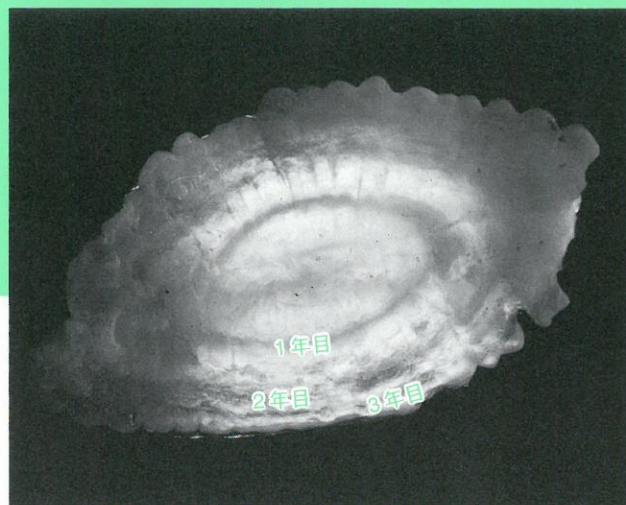
発行：宮城県水産研究開発センター

☎986-21

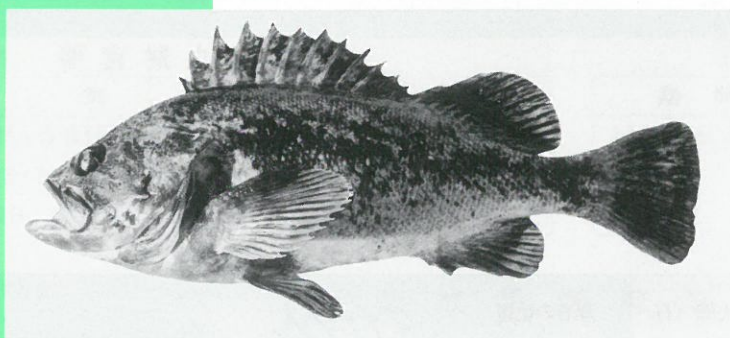
宮城県石巻市渡波字袖ノ浜97の6

☎ 0225-24-0138

FAX 0225-97-3444



クロソイの耳石



クロソイ

目 次

水産研究開発センターの森	2
シーポスト	3
センター発(研究室から)	4~5
平成6年度宮城県水産研究開発センターの主要業務	6
施設設備紹介(アクアトロン)	7
伝言板・トピックス	8

宮城県水産研究開発センター

Miyagi Prefecture Fisheries Research and Development Center

水産研究開発センターの森

宮城県水産研究開発センター

所長 丹野 重雄

当センターは、平成五年四月に、西から南には仙台湾・宮戸波島・石巻湾・尾崎を、東から北には牡鹿半島を眺望する石巻市渡波の袖ノ浜にオープン、はじめての四季を経験し一周年を迎えました。

宮城県の新総合計画と、同じ生まれ年ですが、その基本理念「森と海と人の宇宙論」のイメージを彷彿とさせるエントランス・ギャラリー・研究棟などを囲む敷地には、半島の自然林を背景として、二十種類の植物たちが植栽されております。

「四季花月草木ごよみ」をアイウエオ順で紹介いたします。イヌツゲ・オオムラサキツツジ・カンツバキ・ケヤキ・サツキツツジ・シヤラノキ・シヤリンバイ・シラカシ・ソメイヨシノザクラ・タブノキ・トベラ・ネムノキ・ノシバ・ハマギク・ハマナス・ハイビヤクシン・ヒイラギモクセイ・ベニシダレザクラ・ヤマモモ・リュウノヒゲ。

ここを豊かにしてくれる花・草・木たちの折々の振る舞いは、全国からも外国からも年間八

千六百二十六人を数えた来訪者、前浜に遊ぶ子供達、石巻と半島方面を行き交う人々、四十数人のセンター職員たちへの季節の足音の情報提供者でもあります。有り難い事に周辺に木々に巣食う小鳥たち、さくら・つつじ・ふじなどの花々、潮風たちも手伝ってくれています。シーメールが発行される六月は、遅い裏山の藤の花、海辺のはまなすの花などがうぐいすの声に乗せられて頑張っているでしょう。

ちなみに、先程の総合計画に描かれている将来の宮城像は……。

豊かな英知の森「みやぎ」、地球時代を躍進する経済活性圏「みやぎ」、のびやかな生活創造圏「みやぎ」、自然との対話と交流によるふるさと「みやぎ」、内外に開かれた交流圏「みやぎ」の五つが設定されていますので紹介します。

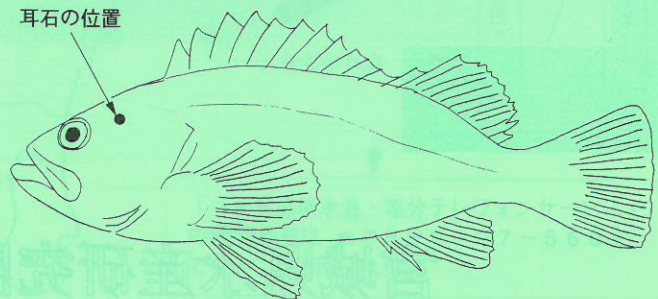
次号のテーマは「宮城研究開発センターの海」でしょうか。

《表紙：せつめい》

クロソイは卵胎生の魚で、卵ではなく魚の状態（仔魚）で生まれてきます。宮城県では昭和58年から放流事業をおこない大きな成果をあげています。また、平成4年からは気仙沼市大島で音響馴致を利用した放流試験も実施しており、これからの成果がおおいに期待されています。

大きいものは45cmを越えるものがあり、表紙は4歳で41cmに成長したクロソイの耳石です。

耳石の位置



未来への夢づくりを



女川町長

須田 善二郎

地球全面積の七〇％が海である。然し海の生産力は全海洋面積の僅か〇・六％を占めるに過ぎないと云われている。それは水深五〇m未満の浅海であり、干潟、磯、浜でその大部分を担っていることを意味する。

いま国際漁業規制、資源減少など地域漁業経済を支える水産漁業の諸情勢は極めて厳しく、その活路を未来に向かって展開し構築する選択肢は、沿岸漁業を中核とする資源管理と資源培養型漁業に求めざるを得ないことは論を俟たない。

それが資源の再生産と有効な漁獲行為を両立させ、持続生産性を維持することになる。

センター開設以来僅か一年余の短い時間の中でさえ、地域を取囲む水産漁業環境の著しい変化の現実を視るとき、これからのセンターの果たす役割と使命、我々の寄せる期待は益々大きい。

みやぎ・シーメールが水産宮城、地域の漁業の未来への理想を語り、夢を描いてくれる地域と密着した情報誌として、身近かな親しめる海と魚の大事な案内役として地域に貢献することを期待して止まない。

シ ー ポ ス ト

開かれたセンターに期待を寄せて



宮城県漁協婦人部連合協議会

会長 阿部 美保子

太平洋を目の前にしたすばらしい自然環境のもとに宮城県水産研究開発センターが開設されましたことは、私共漁業者にとりまして大きな魅力でございます。

昨年開所まもなく見学会や研究発表会に参加させて頂きまして皆様方の熱心な取り組みに深い関心と感銘を受け、これからの沿岸漁業に大きな期待を膨らませて居ります。

浜々では乱獲と密漁による資源枯渇や海の汚染による不安をつのらせ、又、労働環境の問題など漁業ばなれの数々の要因をかかえて過疎と高齢化が進んで居ります。

資源管理型漁業の推進を図り心豊かに暮らせる魅力ある漁村を目指して、女性も大いに参画し知恵を出し合い心を寄せ集めるなど自助努力を忘れずに、頑張らねばと考えて居ります。どうぞ一層の御指導をお願い申し上げます。

開かれたセンターとして又水産宮城の核としての貴センターのご活躍を御期待申し上げます。

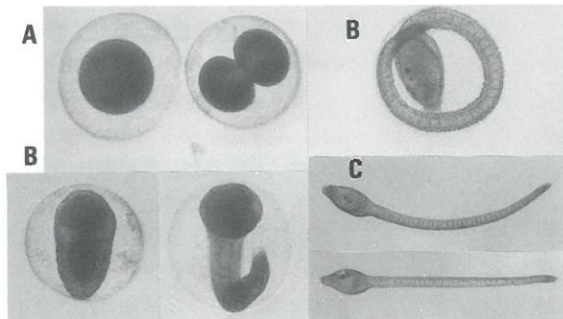
マボヤの産卵と付着の謎を解く

佐々木 良 (環境養殖部環境保全科)

そろそろ初夏、ホヤの旬です。今回は物言わぬホヤとキュウリならぬ無口なカキ「殻」との取り合わせの妙について述べてみたいと思います。

ホヤの語源は昔のかまどー火屋(ほや)ーに由来するようで、当て字の海鞘、老海鼠、保夜等あるいは英語のsea-squirt(水鉄砲)、学名のAscidacea(酒の皮袋)もそれぞれよく特徴をとらえている。

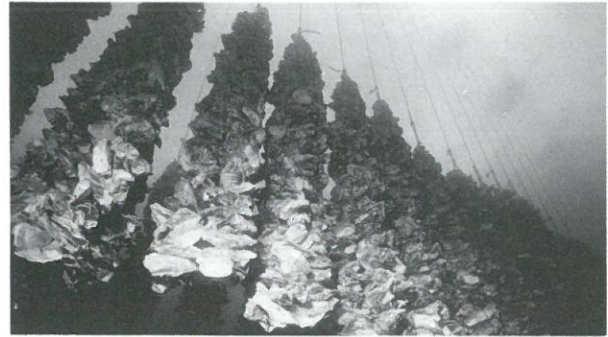
さて、いわゆる「海のパイナップル」と呼ばれるマボヤ養殖は明治38年唐桑の畠山氏が錨綱に用いた山葡萄のつるにホヤ仔が付いていたのを発見したことに端を発するという。その後、資材の耐久性面から天然ホヤの採取が長い間生産の主であったが、昭和40年代後半から養殖が普及し、今ではそのほとんどが天然採苗によって支えられた養殖生産です。そして、本県におけるホヤ養殖は、ここ10年平均で約5,000トン、全国生産の約7割を占めています。これは太陽と海の栄養から生まれる植物プランクトンを餌とした、まさに天与のシー・メール(海からの贈り物)です。



マボヤの発生 A : 受精卵 B : 尾芽胚 C : Tadpole 幼生

ところでこのホヤの天然採苗については、これまで伝統的に「冬至の頃、海の中層水深付近にモノを下げるとホヤ仔が付く」という浜での経験に基づいている。しかし、その実態、メカニズムに関する調査研究は年末年始の仕事になるためか、ほとんど見当たらない。

マボヤの発生は別図のとおり、受精24時間後に初期尾胚芽、48時間後にふ化開始し、その後オタマジャクシ型(Tadpole)幼生として半日~3日間程浮遊生活した後、適当な基盤に付着する。すなわち、産卵後5日間程でその後の一生を委ねる相手先を見つけなければそのまま朽ち果ててしまうので、そのようなホヤの弱味につけこんで人間が海中に付着基質となるカキ殻を設置する訳です。これまで葡萄つる、桜材、パーム、シビ縄等が基質として使われてきましたが、三陸産のカキ殻は大型で彫りが深く適度な凹凸に富むことから、ホヤ幼生にとって文字通り最適のゆりかごです。



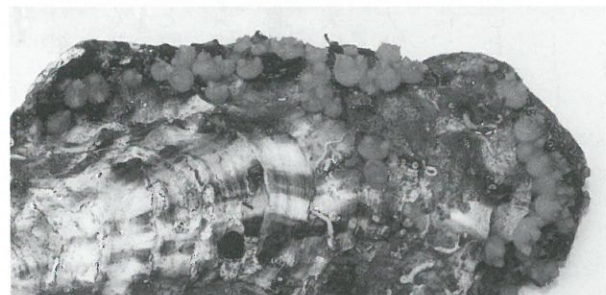
海中垂下されたマボヤ採苗用カキ殻連

「牡蠣むきの殻投げ落す音ばかり」 汀女

そこはかたなく寂寥感の漂うカキ殻ですが海に垂下し半年もすると見事に殻一面グミ状の赤いホヤ仔が付き、再び新しい生命の土台となって生返る訳です。

本来、マボヤのように浮遊幼生期間が短い種類は、年により水温条件が異なると産卵時期も変わり易いことから採苗適期を見逃してしまう危険性が大きいと言える。その対策としては、ある程度事前に産卵時期を的確に把握する必要があり、「一体、マボヤが集団で産卵を開始する引き金とは何なのか？」を解明することは、単にホヤ仔の採苗成績のみならずその後の養殖生産をも左右する重要な鍵になります。

この数年来、正月気分もそこそこに取り組んできた調査結果を要約しますと、幼生の大量出現の前に植物プランクトンが急増する現象が多いことから、マボヤは餌となる植物プランクトンを集団の産卵合図と感知しているのではないかと推測されます。そして、親によるこの餌条件の確認はやがて付着するホヤ仔発育の栄養源確保にも通じるという仕掛けです。さらに、天然下では昼前後にプランクトン採集すると受精直後のマボヤ卵が多数認められることから、これも群として同一時刻に同調し放卵・放精するための昼・夜光周期を



カキ殻に付着し半年後のホヤ仔

利用したホヤの知恵の産物です。

これらはまだ仮説ですが、機会があれば再びホヤ幼生の分布・分散過程等について報告したいと思いますので、何かあればご連絡下さるようお願いいたします。

さて、ホヤの祖先が最初に出現したのはカンブリア紀であるという。遙か5億年間の海水変化が凝縮したその格別なる味わいを今夜ビールと共にいかがですか？

「ヒラメの資源管理について」

笠原 恵介 (海洋資源部資源科)

水産資源は、再生産によって子どもが生まれ、しかも刻々と成長していますから、獲ってもまた増えるという更新力を持っています。しかし、ここで大切なことは、この獲り方と増え方のバランスです。獲り方の上手、下手で増え方や漁獲量に大きな影響が及び、無制限な漁獲の強化は資源や漁業の衰退につながる恐れがあるからです。こうした理由で、資源を管理することが古くから様々なかたちで行われてきました。漁期、漁場、漁具、漁法などの制限や漁獲物の大きさや量の規定などは、すべて資源管理の一貫ということができます。

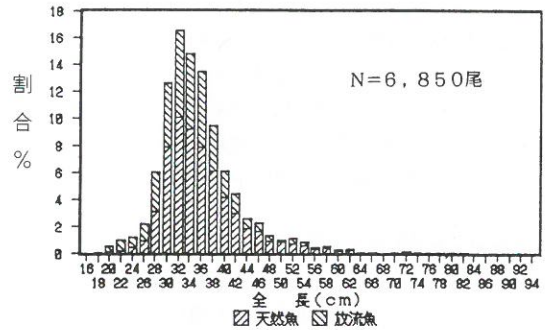
ここでは、現在、本県を含む青森～茨城県の水産研究、行政の各機関や漁業関係者が一体となって検討しているヒラメの資源管理に関して、その漁獲実態と今後資源管理を実施した場合の効果について紹介します。

昭和40年代の前半に150トン近くあった本県のヒラメ漁獲量は、増減を繰り返しながらも減少し平成4年には約50トンに減少しており、これは青森～茨城県でも同じ状況です。このように減少しているヒラメに対し、資源管理に関する具体的方法を取り入れ、漁獲量を増やすために、各県水産研究機関は連携をとりながらヒラメ資源の調査、解析を行ってきました。

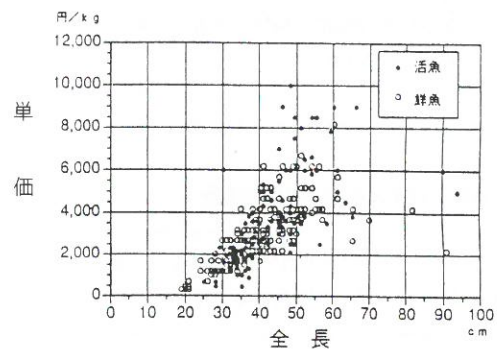
- (1) 昨年、県内主要魚市場に水揚げされたヒラメは全長18～82cmの範囲にあり、30cm以下、30～40cm、40cmを越えるものがそれぞれ24%、60%、16%の割合です(図1)。
- (2) 大きさが単価が異なり、50～60cm前後までは大型ヒラメほど高い単価で取り引きされています(図2)。
- (3) これらの関係から、近年のある水揚実態例をみると(図3)、30cm以下が尾数で40%を占めているにも関わらず重量で18%、金額で5%にしかならず有効に資源を利用していないことがわかりました。
- (4) 年齢を見ると、1歳、2歳、0歳の順に多く3歳以上は少なくなっています(図4)。寿命の推定はむずかしいことですが、6歳以上の中には大型の雌を中心に高齢魚が存在し、これまでの調査では19歳が最高齢でした。
- (5) こうした漁獲実態の中で、一例として30cm未満のヒラメを獲らない場合の本県における管理効果を試算したのが図5です。尾数では大きな割合を占めながら、漁獲量や金額ではわずかにしかならない小型ヒラメを保護する方法で漁獲量が増加するという予測ができました。

ヒラメをモデルにしたこの資源管理は、昨年度「広域回遊資源管理推進指針」に示され、今年度から来年度にかけて漁業者の方々を含めた検討が行われるなど、その体制づくりが始められます。こうした努力が実を結び、

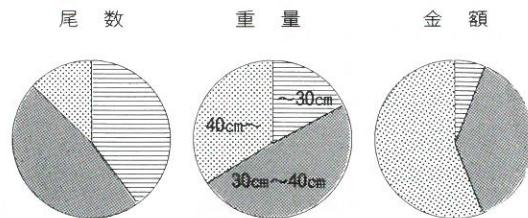
水産に携わる一人ひとりが資源管理意識を強く持ち、一層豊かな生産の場としての海を実現したいと思います。



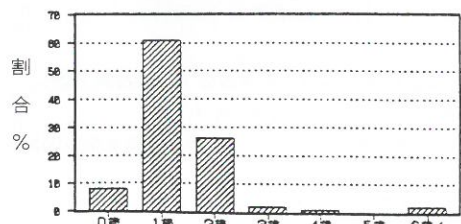
(図1) 漁獲ヒラメの全長組成(平成5年)



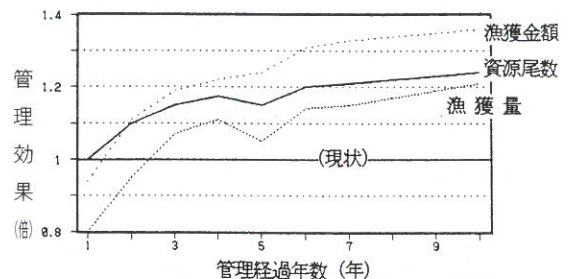
(図2) ヒラメの全長と単価の関係



(図3) ヒラメの水揚げ尾数、重量、金額割合



(図4) 漁獲ヒラメの年齢構成(宮城県)



(図5) ヒラメの全長制限による管理効果

平成 6 年度宮城県水産研究開発センター主要業務

I 養殖・防疫分野

- | | |
|------------------------|---|
| 1 沿岸養殖業安定化対策事業（県単） | ：ノリ・ギンザケ・ホタテ等調査・通報、会議運営等。 |
| 2 かき養殖安定化推進試験（県単） | ：カキ・種ガキ。親貝成熟度調査、浮遊幼生分布調査、付着試験。精子・受精卵放流試験、同推進検討委員会の運営。 |
| 3 二枚貝類種苗生産システム開発試験（県単） | ：トリガイ等省コスト・省力タイプの飼料培養、浮遊幼生飼育、陸上稚貝飼育システム、技術移転。 |
| 4 養殖水産動物保健安全対策事業（国補） | ：魚類防疫指導、水産用医薬品適正使用指導、検討会・研修会開催。 |

II 増殖・栽培漁業・資源管理分野

- | | |
|-----------------------|---|
| 1 地域特産種量産放流技術開発事業（国補） | ：ホッキガイ栽培事業化への展開。中間育成技術開発、陸上流水飼育試験、資源添加技術開発。 |
| 2 さけます資源管理推進事業（国補） | ：増殖事業の効率化、志津川以南。 |
| 3 さくらます資源増殖振興事業（国補） | ：放流効果の測定、志津川以南。 |
| 4 あゆ資源増大促進事業（県単） | ：種苗生産体系の確立、資源増大。 |
| 5 特定海域新魚種量産技術開発調査（国補） | ：ニシン栽培事業への展開・資源生態の特性、放流効果、資源管理手法。 |
| 6 資源管理型漁業推進総合対策事業（国補） | ：広域回遊資源・ひらめ。管理計画策定調査&資源管理の実施。 |
| 7 同（国補） | ：地域重要資源調査・雄勝湾漁協あわび。資源調査、資源管理指針の策定。 |
| 8 あきさけ資源利用配分適正化事業（国委） | ：親魚標識放流再捕による産卵回遊期の生態に関する情報収集。 |

III 新技術・バイオテクノロジー分野

- | | |
|-----------------------------|--|
| 1 藻類バイオテクノロジー技術開発試験（県単） | ：アマノリのプロトプラストを作出、直接採苗&細胞融合手法による優良品種作出及びワカメの組織培養による優良品種作出。 |
| 2 三倍体マガキ作出安定化及び量産技術開発事業（県単） | ：3倍体マガキ作出条件、UP-BELLINGシステムによる高密度飼育、フローサイトメーターを用いた倍数性測定法の改良、特性評価、経済性評価。 |
| 3 新品種作出基礎技術開発事業（国委） | ：マガキ地方品種の交配選抜による高品質マガキの作出。 |
| 4 遺伝子資源の有効活用による研究（県単） | ：微生物飼料及び水質安定に利用される微小藻類を遺伝子資源として保存する。 |

IV 環境・赤潮・貝毒分野

- | | |
|--------------------------------|--|
| 1 漁場環境汚染監視調査事業（県単） | ：ギンザケ養殖漁場の漁場環境監視及び漁場改善技術開発調査。志津川湾・女川湾。 |
| 2 漁場保全対策事業（国補） | ：生物モニタリング調査等の漁場環境の監視、漁業被害の未然防止・防除。 |
| 3 赤潮情報伝達事業（国補） | ：赤潮・貝毒情報収集通報。研修会の開催。 |
| 4 貝毒監視事業（国補） | ：下痢性・麻痺性、プランクトン、貝毒調査・監視。安点・分布調査。 |
| 5 貝毒被害防止対策事業（国委） | ：下痢性貝毒の毒化予知手法の開発。気仙沼水試共同。 |
| 6 温排水影響調査（国交付金） | ：女川原子力発電所温排水調査及び通報。水質・底質・流動・生物等。 |
| 7 浅海漁場水質汚濁調査（県単） | ：松島湾・万石浦（ノリ・カキ・アサリ漁場）調査及び通報。 |
| 8 仙台湾貧酸素水発生機構調査（県単） | ：観測及び発生機構調査。S63夏に発生。 |
| 9 大型植物バイオマスによる海域浄化と生産力向上試験（県単） | ：アマモ・アカモク・オゴノリ等による海域浄化及び生産物の有効利用化。松島湾リフレッシュ関連。 |
| 10 漁場改善技術開発試験（県単） | ：かき殻利用技術開発…アサリ等発生基質・漁場の造成、カキ養殖漁場の底質改善。 |
| 11 養殖漁場改善対策調査事業（国委） | ：かき殻利用技術開発…ギンザケ養殖漁場の底質改善。 |

V 漁況海況調査・予報、資源調査・漁船漁業分野

- | | |
|---------------------------|--|
| 1 漁況海況予報事業（国補・県単） | ：資源の合理的利用と操業の安定化を図るため海洋・資源情報を調査・収集・提供。 |
| 2 海況情報収集迅速化システム開発試験事業（国補） | ：新宮城丸搭載、流向・流速、水深、水温、GPS位置のコンピューターによる情報収集及び解析と利活用。 |
| 3 水産物生態調査（国委） | ：マグロ・カジキ資源の変動機構の調査究明。 |
| 4 日本周辺くろまぐろ調査（国委） | ：北太平洋におけるマグロ資源管理のための資源動向調査。 |
| 5 200海里水域ない漁業資源調査（国委） | ：沿岸沖合資源の調査・評価。 |
| 6 太平洋系マイワシ資源等緊急調査（国委） | ：太平洋系マイワシ資源動向の調査解析。 |
| 7 沿岸域漁業資源回復対策調査事業（県単） | ：資源変動の調査解析、漁獲管理方式の策定。 |
| 8 資源管理型漁業水深対策事業（県単） | ：人工礁漁場造成評価調査（定量的効果調査）。 |
| 9 水産業関係地域重要新技術開発促進事業（国補） | ：ツノナシオキアミの生物特性・漁場形成要因調査、漁況予測手法の開発。 |
| 10 漁場生産力モデル開発基礎調査（国委） | ：三陸～常盤沿岸海域の基礎生産量から魚類に至る生産モデルの策定。国(東北水研)、岩手県、福島県との共同調査。 |

VI 教育研修分野

- | | |
|-----------------------|--|
| 1 自主企画研修講習会の開催（県単） | ：県水産関係試験研究機関連絡調整、県水産関係試験研究成果発表大会、海の教室、担い手育成研修。 |
| 2 広報事業（県単） | ：広域資料作成提供…宮城の水産業、宮城の伝統的漁具・漁法、ビデオライブラリー等。 |
| 3 漁業就業者確保育成対策事業（国補） | ：潜水技術講習会の開催。 |
| 4 地域・団体の研修・講習会の開催及び支援 | ：種カキ採苗、赤潮・貝毒、ノリ養殖、サンマ漁業、魚病、沿岸小型漁船漁業、水産青年フォーラム、漁村青年・研究・婦人活動発表大会等。 |

調査船の主な運航経過 (平成6年2月～平成6年5月)

船名・新大東丸

期 間	用 務
1月31～2月3日	沿岸定線調査
2月15～17日	オキアミ分布調査
2月28～3月3日	沿岸定線調査
3月8～11日	イカナゴ分布調査
4月4～7日	沿岸定線調査
4月11～14日	コウナゴ分布調査
4月18～20日	オキアミ分布調査
5月9～12日	沿岸定線調査
5月17～20日	マイワシ分布調査
5月23～24日	仙台湾標識ボンデン設置
5月25～26日	オキアミ分布調査
5月30～6月2日	沿岸定線調査

船名・開 洋

期 間	用 務
2月1～4日	浅海定線調査
2月7日	魚礁効果調査
2月8日	仙台湾底質調査
2月15～17日	石巻湾稚魚調査
2月24～25日	魚礁効果調査
2月28～3月3日	浅海定線調査
3月7～9日	魚礁効果調査
3月15～17日	イカナゴ分布調査
4月4～7日	浅海定線調査
4月11日	女川湾流速計設置
4月18日	ニシン稚魚調査
4月26日	女川湾流速計撤去
5月9～11日、13日	浅海定線調査
5月18日	女川湾底質調査
5月24日	タラ・ニシン稚魚調査
5月30日～6月2日	浅海定線調査

船名・新宮城丸

期 間	用 務
1月27～3月14日	マグロ延縄調査
4月13～28日	カツオ漁場調査
5月10日～6月6日	カツオ、マグロ漁場調査

施設設備紹介

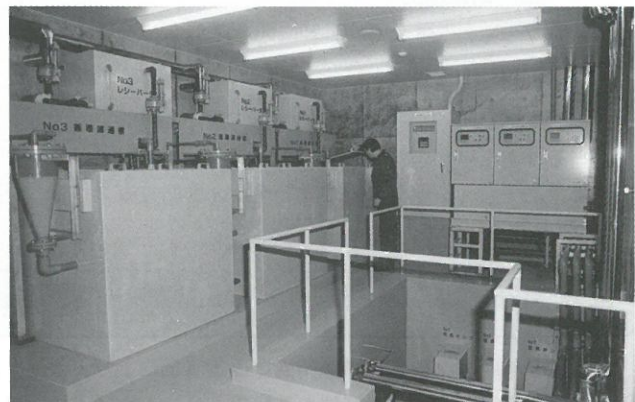
アクアトロン(海水加温冷却装置)

海産生物を飼育する際、その時期の海水温より高い水温あるいは低い水温を必要とする場合があります。また、いろいろな水温設定で飼育実験を行うこともよくあります。そんなとき威力を発揮するのがアクアトロンです。

当センターのアクアトロンは3系統から成り、それぞれ5℃から30℃の範囲で任意の水温設定が可能です。から、ポンプで海から汲み上げたばかりの海水を含めて、常に4種類の

水温の海水を使うことができます。また、濾過槽を備えた循環式なので、1系統当たり最大で毎時7.2トンを経済的に流すことができ、しかも経済的です。

春から夏にかけてのマグキ、トリガイなどの二枚貝の幼生飼育(加温)や海藻の培養(冷却)、秋から冬にかけてのアユの種苗生産技術開発(加温)、さらにこれらの餌となるプランクトンの培養(加温)などに周年活躍しております。



主 な 行 事

期 間	行 事 名
2月4日、18日、3月3日	経営管理講座
2月25日	海の教室
3月28日	カキ養殖安定化推進検討委員会

研 究 成 果 課 題 等 発 表

期 間	場 所	学 会 等 名	発 表 者	発 表 課 題
H6.2.8	女川町	沿岸小型漁船春漁対策会議	児玉純一	平成6年春漁の漁海況見通し
2.22～23	塩釜市	平成5年度東北ブロック増養殖研究連絡会議	藤原 健	1993年春季に発生した麻痺性貝毒について
3.11～12	勝田市	水産海洋学会イカナゴシンポジウム	児玉純一	産卵親魚の量がイカナゴ稚子の発生量を左右するのか

試験研究成果発表会の開催日程決まる

昨年行いました県内水産関係試験研究機関の成果発表会には一般漁業者を始め漁協青年部、婦人部さらに加工業者、魚市場関係者の方々など200名を越える参加を得て多くのご意見を頂きました。

今年も下記により実施しますので多数の方々のご参加をお待ちしております。

日 時：平成6年6月30日(木曜日) 午前10時から午後4時まで

場 所：石巻グランドホテル

発表内容：

- | | |
|-----------------------------------|--------------|
| 1 栽培・資源 | |
| (1) クロソイの音響馴致について | 富川なす美 (気水試) |
| (2) ヒラメの資源管理について | 笠原 恵介 (水研開セ) |
| (3) 魚類種苗の均一化に関する研究について | 太田 裕達 (栽培セ) |
| 2 魚病・バイテク | |
| (1) ギンザケ養殖における医薬品の効能拡大について | 熊谷 明 (内水試) |
| (2) ギンザケの全雌国産卵について | 千田 康司 (内水試) |
| 3 利用加工 | |
| (1) 低塩タラコの保存性向上手法の検討 | 浅野 勝志 (加工研) |
| (2) 近海多獲性魚の有効利用による水産加工業の活性化を目指して | 高橋 昭治 (加工研) |
| 4 貝類・貝毒 | |
| (1) キタムラサキウニに関する研究について | 阿部 修久 (栽培セ) |
| (2) 宮城県北部海域におけるホッキガイ増殖事業の現状 | 伊藤 貴 (気水試) |
| (3) 仙台湾の麻痺性貝毒について | 藤原 健 (水研開セ) |
| 5 話題提供 | |
| 「水温、塩分自動観測システム」及び「魚市場水揚情報システム」の紹介 | 和泉 祐司 (水研開セ) |

伝
言
板

「ツノナシオキアミ底付き群の行動観察調査」 平成6年7月22～25日

当センターは、海洋科学技術センターと共同調査で「しんかい2000」により、平成6年7月22～25日の間に金華山沖水深200～260mの海域で「ツノナシオキアミ底付き群の行動観察調査」を行います。

トピックス

「みやぎ沿岸水温・塩分テレフォンサービス」を開始

平成5年度全県地域沿岸漁業構造改善事業により、水温・塩分自動観測システムが当センターを核として新たに整備されました。本システムは、価値ある情報をリアルタイムに提供することにより、沿岸漁業の安定化や資源管理型漁業の一層の推進を図ろうとするもので、これにより平成4年度から整備を進めている「総合水産行政情報システム」がさらに充実したものとなりました。

本システムは、県内3箇所に設置した自動観測装置（海上局）で測定された自動観測データを、漁協事務所の受信装置（陸上局）で受信し、それを電話回線で当センターのマスター局に自動送信しデータベースに格納するというものでこれにより迅速な海況情報提供が可能となりました。

さらに、このデータを基に、同時に整備された音声応答システムにより、「みやぎ沿岸・水温塩分テレフォンサービス」を開始しており、今後、養殖業の適正管理や漁船漁業の効率化等を目指しています。

